ササキ

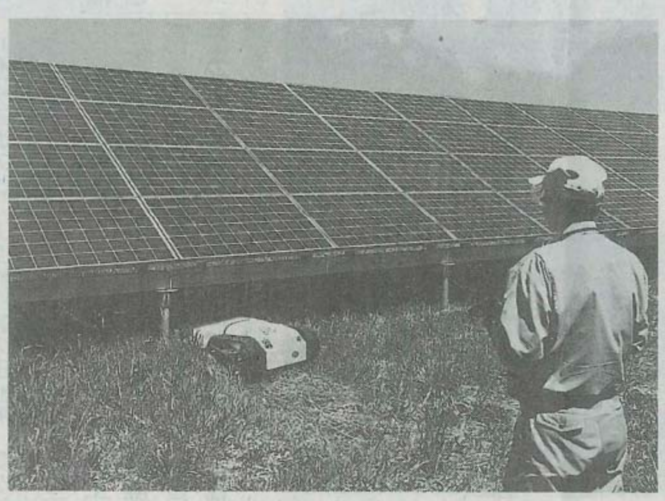
電動リモコン作業機を初披露

草刈作業の省力化提案

太陽光発電システム施工展出展

佐々木社長

ササキコーポレーション（佐々木一仁社長）は、東京ビッグサイトで2月28日～3月2日まで開催する「第9回太陽光発電システム施工展」で太陽光パネル敷設現場の草刈作業などに便利な新製品・電動リモコン作業機「スマモ」を初披露する。発電施設現場での草刈りは必須。そうした作業の省力化に貢献すべく開発した（小間番号：東3ホールE25―18）。



新商品の「スマモ」

ササキコーポレーション＝青森県十和田市大字三本木字里ノ沢1―259＝は、太陽光発電現場の省力化の提案として電動リモコン作業機「スマモ」を出展。太陽光発電システムを構成する機器をはじめ、設計・施工・取付け・監視・メンテナンスに関する製品・技術が一堂に介する同展示会で初披露する。

同機はコンパクトでパワフルボディな走行ユニット「RS400―1（全幅655㎜、全高396㎜）」と、ワイドな刈幅の草刈部アタッチ「M700（刈幅716㎜）」の組合わせ。工具なしで簡単に装着できるお洒落で可愛い機械だ。駆動方式はバッテリ駆動で、リモコンによる簡単操作。また、75デシベルの低騒音で音による疲労の心配もなく排ガスゼロと環境にも優しく作業ができるのがポイントだ。

バッテリ製品でもっとも気になるのが作業時間。同機はバッテリ1個タイプ（RS400―1）と2個タイプ（同―2）をラインナップしており、前者の走行可能距離は8.8㎞で、後者では17・6㎞（共に速度毎時3.2㎞の場合）。草刈作業距離に関してRS400―1は1.1㎞、同―2では2.2㎞（草丈約30㎝/毎時1㎞の場合）とスピーディな作業を行うのに十分な能力を備えている。

太陽光パネル発電現場において雑草は天敵といっていい。特に梅雨時から夏場にかけては草の成長速度が早く、放置しているとパネルに雑草がパネルにかかってしまい、影がかかる状態になると発電量にも影響を及ぼすだけに無視できない。こうした雑草対策はいろいろ講じられているが、多い対策の一つが刈払機を使用した方法。自分で容易に行うことができる反面、春先から秋にかけて毎月のように草刈りが必要な場合もあるだけでなく、草に隠れて石にチッパの刃が当たり、飛び石によりパネルの破損といったケースもしばしば。何よりこうした現場は足場の悪い場所も多いため、安全作業という点からも悩みの種となっているのが現状だ。

こうした課題解決に同社が開発したのが電動リモコン作業機「スマモ」。雑草が刈りにくい低く狭い場所での作業を考えて設計されていることから、太陽光パネル下の草刈り作業にうってつけだ。

近年、休耕地を太陽光発電所に転用した事例が増加。「スマモ」はクローラー仕様なので休耕地に設置した太陽光パネルの下草刈でも威力を発揮する。また、果樹園や柵の下といった障害物の多い場所、ガードレール下といった場所など、アイデア次第でさまざまな場所での活用が期待できるので、是非会場で確認して欲しい。

その他、同社ブースでは高含水率チップの燃焼を可能にした木質バイオマスボイラー「キャップファイヤー『匠』」を展示。また、併催する「第3回国際バイオマス発電展」の日本木質バイオマスエネルギー協会ブースにおいて、そのキャップファイヤー『匠』に関するセミナーを開催する。

高含水率WB50%の木質チップ（生チップ）も燃料として使用できる予備乾燥装置を標準装備している同機。同社では展示会の無料招待券を用意しているので、問合せは営業企画部営業課へ。同社への連絡先並びにセミナーの詳細は次の通り。

▽問合せ先＝電話：0176―22―0308/Fax：0176―22―4068、営業企画部営業課▽セミナー日時＝3月2日①13時～13時15分②16時～16時15分▽セミナー会場＝東4ホール、小間番号E30―8。

やまびこ

売上高は1029億円

平成29年12月期連結業績

永尾社長

やまびこ（永尾慶昭社長）は2月14日、平成29年12月期の連結業績（平成29年4月1日～12月31日）を発表した。売上高は1029億4800万円、営業利益は62億8300万円、経常利益は68億2300万円、当期純利益は49億3000万円、売上高のうち国内は317億4000万円、海外は米州が615億8100万円、米州以外が96億2600万円。

同社は、海外連結子会社と決算期を統一して、グローバルに展開する同社グループの経営および事業運営効率化を図ることを目的に、従来3月31日としていた連結決算日を12月31日に変更。また決算日が12月31日以外の連結子会社についても同様の変更を行っている。これに伴い、同社および従前の決算日が3月31日であった連結子会社については9カ月（平成29年4月1日から同年12月31日）、12月決算の子会社については12カ月（平成29年1月1日から12月31日）を連結対象期間としている。このため、以下の売上高および損益にかかわる前期比比較については、前年度が当連結会計年度と同様の連結対象期間であったと仮定して調整した売上高および損益（非監査）との比較で記載している。

連結売上高は1029億4800万円（前期比5.0%増）。その内訳は、国内売上高が317億4000万円（同3.5%増）、海外売上高は米州が615億8100万円（同5.8%増）、米州以外が96億2600万円（同5.2%増）となった。セグメント別の概況は次の通り。

【小型屋外作業機械】国内は前期並み。米州は主力の北米市場も前年並みで、米州以外の海外の最大市場である西欧は落ち込んだが、回復基調にあるロシアや販路拡大に取り組んだ中国などで販売数量を伸ばしたほか、為替の影響もあって増収。結果、小型屋外作業機械の売上高は744億4800万円（同3.3%増）。

【農業用管理機械】国内は、自走式草刈機が果樹農家向けを中心に好調に推移するとともに、前期に排出ガス規制特需の反動から低迷したスピードスプレーヤが回復したことなどにより増収。北米農業機械事業は、ポテト収穫機の新製品投入や拡販活動により伸長した。結果、農業用管理機械の売上高は167億4500万円（同9.5%増）。

【一般産業機械】国内は増収。海外は北米の発電機の販路開拓が奏功したことなどにより大幅な増収となり、その結果、一般産業用機械の売上高は100億8100万円（同16・8%増）。

【その他】主要3事業以外の売上高は、自動車用試作部品や除雪機などが振るわず16億7200万円（同16・2%減）。

【次期の見通し】次期の売上高は1200億円（調整後増減率2.6%増）を見込んでおり、国内は各事業ともに当期の好調を維持し、増収を期待。海外は、小型屋外作業機械市場が次期は回復するものと見込まれる。損益面では、営業利益は73億円（調整後増減率22・3%増）、経常利益は70億円（同10・9%増）、また当期純利益は52億円（同45・4%増）になるものと予想している。

◇　◇

同社は2月14日に開催した取締役会で設立10周年記念配当を含めた予定額を決議。1株につき5円実施し、普通配当と合わせた1株当たりの配当金は年間40円を予定している。また役員に対する業績連動型株式報酬制度を導入したことも発表した。

やまびこの林営業本部長に訊く

製品と営業の質向上

〝満足〟提供するグループへ

今年1月1日に営業本部長に就任した。昨年4月には北海道から九州の販売会社が統合してスタートした、やまびこジャパン㈱の代表取締役社長も兼務。今後の展開などを伺った。

——農業関係を志向したのは

大学が農業工学系だったこともあるが、農業の持つ牧歌的な雰囲気に憧れていた。入社後は鹿児島、広島、島根等の営業所に赴任し、営業畑を歩いてきた。その後、本社で提携メーカーとの共同開発にも携わった。他、国内販売会社社長、農業機械本部長も担当させて頂いた。ここまでできたのは人の出会いに恵まれたからだと思う。

——業界の動向についてどう考えているか

世界の小型屋外作業機マーケットでいえば、電動製品は存在感を増している。だが、エンジン製品の市場規模も世界的には縮小していない。そうしたことを踏まえ、プロ市場で確固たる地位を築くべく小型エンジン製品の開発が第一。もちろん国内外の市場にはプロ市場でも受け入れられる電動製品を開発してゆく。

——共立・新ダイワ・エコーとブランドごとの戦略について

共立も新ダイワもお客様から高い品質と性能を認めて頂き、現在のブランドポジションがある。そう今はグループとして軽くて扱いやすく安全にこだわった製品開発に着手している。軽いうえに高耐久で高性能・高出力という製品は、非常に高い技術力が求められるが、やまびこはそこに拘ってゆきたい。

——今後注力していく点について

マーケットシェアを見れば発電機・溶接機分野では拡大できると見込んでいる。震災以降、農業分野でも非常用電源として関心を集めている。またICT農業ということで設備もデジタル化が急速に進んでおり、バックアップ電源に関して非常に関心を頂いている。また、農業規模拡大に伴い、機械や設備の修繕に、発電機需要も高まっている。

——販売店との関係について

同じ地域で農林・緑地管理機械販売へのお客様と一般産業用機械販売でのお客様にむけて分散していた拠点については、広くお問い合わせに対応できる拠点となるよう機能の整備を進めている。その一環として昨年11月の帯広営業所新築に続き、中部支社の建替や九州へのサービスセンター設立を現在計画し、お客様との距離をあけない営業体制を展開していく。

——農林業界での課題は

高齢化と農業の高度化。一メーカーでどうお役立ちできるか、それには営業部門はもとより、お客様に対して何が提供できるかに掛っている。

——今後の展望は

やまびこジャパンは3つの行動規範を掲げた。それは「お客様の満足」「社員の満足」「社会の信頼と満足」だ。この満足を突き詰めて良い会社になりたい。良い会社とは売上を上げることが最終の目的ではなく、関わる人たちが幸せになれる良い会社を目指したい。

——趣味、座右の銘は

若い時はウインドサーフィン・自転車に没頭していたが、今は特にない。座右の銘は戦国時代中国の儒学者である孟子の言葉とされている〝天の時 地の利 人の和〟。

【林智彦営業本部長の略歴】1960年7月22日生まれ、84年共立エコー物産入社、2008年東部共立エコー代表取締役社長、14年やまびこ執行役員農業機械本部長、16年同取締役執行役員農業機械本部長、17年同取締役執行役員、やまびこジャパン代表取締役社長、18年やまびこ取締役執行役員営業本部長、やまびこジャパン代表取締役社長。

長期間の効果が期待

Tメディカルパッケージ　画期的暗渠用排水材

簡単に施工できるのもポイントだ

良好なほ場づくりに暗渠などの排水の整備があげられるが、暗渠排水で問題となるのが透水管の目詰まり。発生すれば掘り出して交換が必要となり悩ましいところだ。そうした点の改善に活用されているのがTメディカルパッケージ＝東京都中央区新富1―9―1＝の「暗渠パックサラサラネット」。20年以上の販売実績があり、すでに知っている人も多いのでは。作物の収量増加や品質にも大きな影響を与えるので、果樹園や転作を考えている農家が導入している。

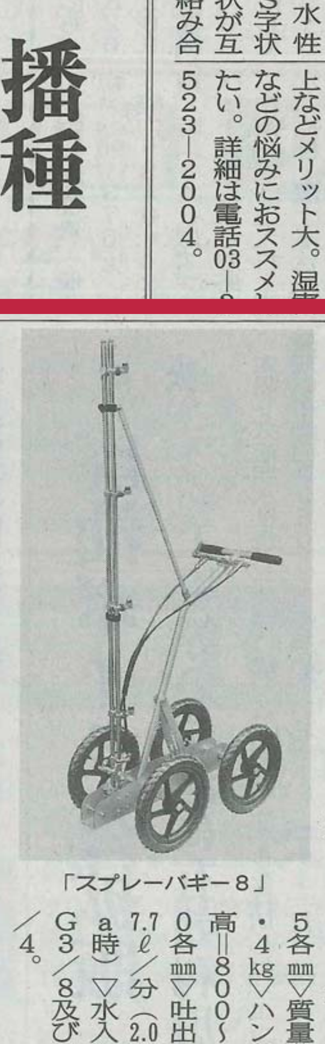
同製品は有孔パイプを使用しない暗渠用排水材。ポリエチレン樹脂製の筒状ネットに詰めたもので、最大のポイントは優れた排水性だ。S字状の形状が互いに絡み合い約50%の大きな空隙を形成。通水断面構造により高い排水能力を発揮する。また、素材が発泡ポリスチレンなので土中に長期間埋設されても劣化しにくいなど耐久性にも優れている。加えて高発泡製品で軽量なため施工現場での横持ちも容易なので施工時間が大幅短縮ができる点でも喜ばれている。

目詰まりしにくいので作土を乾きやすくする効果を長期間期待でき、作物の生育環境を良好にし、農耕機械の作業性向上などメリット大。湿害などの悩みにおススメしたい。詳細は電話03―3523―2004。

永田製作所

手動式の薬剤散布機

低重心・高安定・簡単走行



「スプレーバギー8」

永田製作所＝田中寿和社長、大阪市西淀川区千舟1―5―41、電話06―6473―0835＝は、立木野菜・花卉用の手動式薬剤散布機「スプレーバギー8（エイト）」の拡販に注力している。

本機は、パイプ左右に散布用の扇型噴口を4カ所（計8カ所）設置した構造。足回りは四輪のノーパンクタイヤを採用。本体はスチール製で低重心、高い安定感を実現、移動と走行が簡単にできる。本体寸法は、ハウスの収穫台車に合わせた大きさ。薬剤は全ての登録農薬が使用できる。

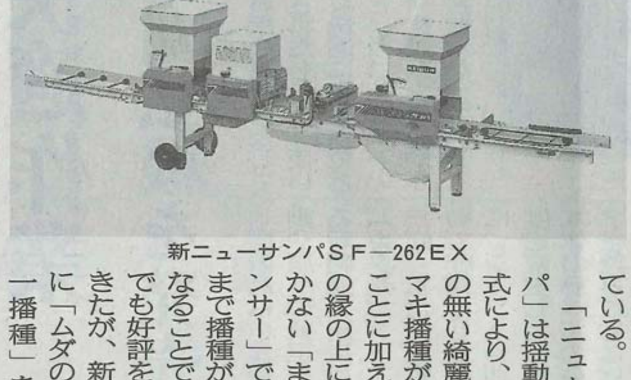
【主な特長】①低重心で安定感のある大型四輪タイヤにより、移動と走行が楽で、操作性がアップ②扇型ノズルを採用、噴霧口角度が自在になり葉裏散布を可能にした。③8ヶ所ある噴口に、それぞれストップ機構（止水）を付け、無駄な散布を解消した。④噴霧管左右にバルブを取り付け、片側だけの散布も可能にした⑤作業者に合わせて、ハンドルの高さが調整できる―など。

【主な仕様】▽寸法＝タイヤ幅410×全奥810～990×全高1745各㎜▽質量＝16・4㎏▽ハンドル高＝800～980各㎜▽吐出量＝7.7ℓ/分（2.0MPa時）▽水入口＝G3/8及びG1/4。

啓文社

箱の隅まで均一播種

自動播種機「新ニューサンパ」



新ニューサンパSF―262EX

啓文社製作所＝柴田修明社長、広島県安芸高田市吉田町山手739―6＝では、昨年10月に新発売した水稲用自動播種機「新ニューサンパSF262・同402シリーズ」が、今春、シーズン本番を前に、早くも引き合いが非常に活発となっている。

「ニューサンパ」は揺動播種方式により、重なりの無い綺麗なバラマキ播種が出来ることに加えて、箱の縁の上に籾を播かない「まきませンサー」で箱の隅まで播種が均一になることでこれまでも好評を博してきたが、新型は更に「ムダの無い均一播種」を目指し、厚まき時に苗箱の縁に乗る籾量をより少なくするよう播種部の停止精度を上げる改良を施した。また、コンセントを増設、大型車輪化により使いやすくした。昨年から本格普及体制に入った密苗（高密度播種）も好調な受注を後押ししたようだ。密苗栽培は決して難しい栽培方法ではないものの、均一に揃った健苗が必須。高品質な苗づくりを目指す農家に高く評価されたようだ。

【新ニューサンパの特長】①揺動式＝振動できれいに播ける②まきませンサー＝センサーが箱フチを感知。播き間（苗箱の縁）に籾がのらない。更に今回播種ブレーキがより正確になった③播種量の調節は、ダイヤルの目盛を合わせるだけで無段階の設定が簡単に出来る④強制的に繰り出すローラやベルトが無いため、芽に優しい播種が出来る⑤コンセント増設⑥大型車輪で楽々移動。

新ニューサンパは薄播きから厚播きまで1台でできる。シリーズのラインナップは▽SF262シリーズ＝少人数向け、2回通し・お手ごろ価格（処理能力は260箱/時）▽SF402シリーズ＝中規模以上に高能率の全自動タイプ（処理能力：400箱/時）▽SF402シリーズ増量タイプ（密苗希望の場合は必ず増量タイプを注文）。

【標準小売価格（税別）】▽SF―262＝26万円▽同―262E＝30万5000円▽同―262EX＝37万5000円▽同402EX（SF―402、KP―402）＝53万5000円。

タイガーカワシマ

厨房機器展に出展

タイガーカワシマ（川島昭光社長）は、2月20～23日、東京ビッグサイトで開催される「第18回厨房設備機器展」に出展。小型食品洗浄機「アクアウォッシュ・キューブ」と業務用洗米機「洗米侍シリーズ」の洗米部から直接ザルで米を受けるザル取りタイプと米を運びやすい高さまで搬送しながら濯ぎを行う水流濯ぎ搬送+ザル取りタイプを出展する。

【概要】▽名称＝第18回厨房設備機器展▽日時＝2月20日（火）～23日（金）、10時～17時（最終日16時30分）▽会場＝東京ビッグサイト東展示棟▽ブース番号＝3―L19。

ホソダ春の展示会

3月3～4日

㈱ホソダ＝河口淳子社長、埼玉県春日部市八丁目1593＝は3月3日・4日、同社本社で「春のきらめき クボタの日『春の展示会大農業感謝祭』」を開催する。3日は9時から15時まで、4日は9時から14時まで。

当日の目玉はトラクタ実演機の特別販売。在庫限りとなっている。

また、両日とも参加無料の特別講習会も開催する。①トラクタ・田植機保守点検講習②メーカー担当者による講習の2種類。このほか、特別企画として、昨年も大盛況だった「食味測定・食味コンクール」を開催する。通常測定価格1000円を100円で行う（測定のみの参加も可能）。コンクール参加成績上位10名には表彰状と副賞を授与。

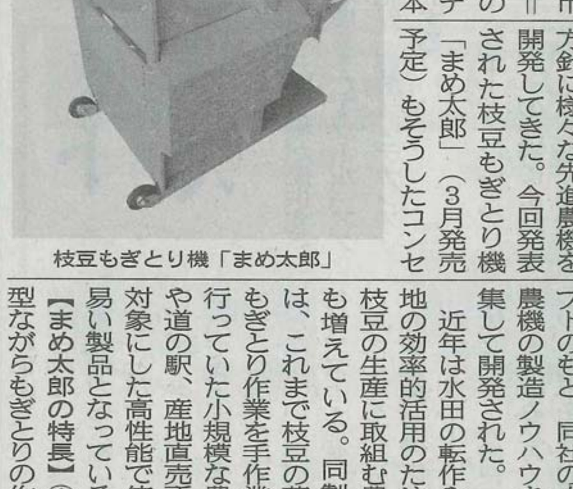
ホクエツ

枝豆もぎとり機発売

最大800本/時の処理能力

浅野社長

ホクエツ（浅野智行社長）は、2月6日～7日、新潟県三条市の燕三条地場産業センターで「2018年 第22回 きさらぎ市」を開催、新製品が出品され注目を集めた（本紙既報）。今回、その中から3月発売予定の枝豆もぎとり機「まめ太郎」を紹介する。同製品は小型ながら最大800本/時の処理能力を持ち、もぎとりの作業労力を大幅に削減する。



枝豆もぎとり機「まめ太郎」

ホクエツ＝新潟県燕市物流センター2―29＝は、創業以来「農家様のニーズにあったスピーディーな商品開発」を基本方針に様々な先進農機を開発してきた。今回発表された枝豆もぎとり機「まめ太郎」（3月発売予定）もそうしたコンセプトのもと、同社の小型農機の製造ノウハウを結集して開発された。

近年は水田の転作や農地の効率的活用のため、枝豆の生産に取組む農家も増えている。同製品は、これまで枝豆の莢のもぎとり作業を手作業で行っていた小規模な農家や道の駅、産地直売所を対象にした高性能で使い易い製品となっている。

【まめ太郎の特長】①小型ながらもぎとりの作業労力を大幅に軽減②特殊扱歯の使用で豆莢にやさしく傷めない③風力調整が可能なトーミ仕様により、未熟莢や葉と豆莢を選別④収穫コンテナをセットして、もぎとり作業を行うので豆莢の回収が容易⑤軽量かつコンパクトでキャスター付きなので、移動・設置が簡単。

型式は、ユーザーの作業場の環境に合わせて単相100V仕様（HM―800S）と三相200V仕様（HM―800T）の2型式を用意。

【製品概要】▽品名＝枝豆もぎとり機「まめ太郎」▽型式＝HM―800S/HM―800T▽寸法（全長×全幅×全高）＝1130×680×1130㎜▽重量＝85㎏▽電源＝単相100V・750W/三相200V・750W▽能力＝毎時～800本/時（8～10秒で2本を処理。品種により異なる）。

同社では「まめ太郎」の他に、枝豆洗浄機、枝豆脱水機、枝豆莢剥き機など枝豆関連製品の豊富なラインナップを揃えて拡販を開始している。